

全国大学書道学会 平成二十八年年度（岩手）大会

# 発表要旨集

期 日 平成二十八年九月二十五日（日）

会 場 岩手大学教育学部

北桐ホール・E 21 教室

馬王堆帛書《戦国策縦横家書》の字形について

新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修(書道)一年

太田 将浩

一九七三年に中国湖南省長沙市で発見された前漢の墳墓である馬王堆三号墓からは、周知のごとく二六種類の帛書が出土した。この中の一つである《戦国策縦横家書》は、破損しているものを含め計二四の断片によって構成されている。断片の全てを復元すると縦が約二三センチメートル、長さが約一九二センチメートルと推定されており、全体の字数は、全三二五行に一万一千余字が書写されていると考えられる。

この《戦国策縦横家書》の字形に関する先行研究には、浦野俊則氏の「秦・漢初の簡牘帛書の書体と隸書の成立」(『二松学舎大学論文集』・一九八八)や矢野千載氏の「隸書の誕生に関する一考察―波磔の出現と変容過程をめぐって―」(『東アジア地域研究』・一九九七)がある。そこで浦野氏は、文字に篆書の字形が看取されつつ、筆画に波法があるため「隸書の性格をも持っている」と指摘し、一方の矢野氏は、篆書の結構を残しながら横画と右斜め下に伸びる斜面に波磔が見られるので、隸書に近似する部分があると述べる。そこで本論ではこれらの先行研究を踏まえつつ、《戦国策縦横家書》にある個々の文字の字形について更に具体的な検討を試みたい。

検討の方法として、まず「又」部分の字形に注目する。それは「又」部分を有する文字に、同一の文字でありながら、異なった字形が存在しているの

で、本論ではその点について詳しく検討したい。特に書体の検討からすすめ、他の字形についても書かれた紙面の位置等に注目して分析する。

三国・呉「谷朗碑」考

大妻中野中学校・高等学校 非常勤講師 小林拓也

本発表では、中国三国時代、呉の石刻である「谷朗碑」の建立の意義、及び書様式について検討していきたい。

現存する三国時代の石刻は、膨大な数量を誇る肉筆資料と比べて極めて少ない。その理由としては、建安十年(二〇五)に発布された、石刻建立の禁止令の影響が考えられるであろう。しかし、そのような状況下でも少数ながら石刻は建立されたため、①禁止令の効力は十分でなかった、②当時、石刻を建立することには大きな意義があった、と考えられよう。

本発表では、まず「谷朗碑」の建立の意義について、②の観点から、後漢時代に建立された墓碑や頌彰碑との比較を通して検討していきたい。「谷朗碑」は、九真郡奪還という呉の軍事的な成果を反映して、国家事業として建立された可能性が考えられる。そのため、後漢時代の私的な立碑とは、その性質が大きく異なると考えられる。

また、「谷朗碑」を中心に石刻資料の観察を行い、「谷朗碑」が書様式の変遷においてどのような位置付けにあるのか、検討していきたい。「谷朗碑」は、従来の漢碑の書様式を幅広く摂取し、かつ東晋の墓誌等に接続していくような書様式をも呈していると考えられる。呉は、建業を中心に後の王朝が誕生する下地を築いたが、書様式に関しても同様であると考えられる。

本発表では、ほとんど顧みられなかった、三国時代、呉の石刻の書道史における重要性について、再検討していきたい。

米芾「張大亨題名」に関する考察

大東文化大学人文科学研究所兼任研究員 中村 薫

研究の意義… 題名とは、人々が名所や旧跡などに「名を題することであり広義には市井一般の落書きまで含む。一般には葉昌熾氏等がいう文人達による題詠や留題題字などを言う。張大亨は『海嶽名言』の原となった米芾の論書を『墨莊漫録』の著者張邦基に渡した人物として僅かに知られるのみである。米芾と張大亨との接点や交友を明らかにし、あわせてこの題名の意義考察と、自然石に刻された書についての制作時代判定法の有効性を論ずる。

方法… 「張大亨題名」は、原石は清代に既に亡失し、王昶『金石萃編』や翁方綱『米海嶽年譜』などにその記述を見るのみであった。近年、王連起等の『米芾書法全集』（丹徒区人民政府他）が発刊されるに及び、やっとその実態が伺えるようになった。この題名について、翁方綱等の過去の碩学等の論じた内容を検証しつつ、米芾と張大亨との接点となった人物との関連を、蘇籟『雙溪集』、何蘧『春渚紀聞』、また『東坡全集』などを原にこの題名を考察する。

結論… 東坡は米芾の学書上の重要な契機を与えた人物であり、張大亨に取っては若きよりの春秋など学問上の重要な師であった。また米芾、張大亨の両者は、『素問』にいう「天干五合」の縁起を喜ぶ性行があり、米芾はこの題名にあえて崇寧五年とせず、吉兆を示す「丙戌」とした。また、題名のような自然石に書かれたものについても、「芾」字を用いての制作年代判定法の有効性の確認ができた。

日本書論における『東坡題跋』の受容

— 貝原益軒『心画軌範』『和俗童子訓』による影響と広がり —

群馬大学大学院教育学研究科国語教育専修二年 今井 裕登

現在の書写書道教育において、楷書↓行書↓草書の順に学ぶことは常識的な学書法となつている。小学校では楷書を学び、中学校から行書を学ぶという流れが一般的な学書法である。江戸時代中期、貝原益軒（一六三〇—一七二四）が中国書論の要諦をまとめた『心画軌範』は、現在の学書法の端緒となつたと考えられる。益軒の書教育に対する考え方は、『心画軌範』の内容を踏まえてより平易な形で書き記された『和俗童子訓』で示されている。楷書から学び始めることや、まず大字から書き始めることなど、現在の書写書道教育につながる点が多く見受けられる。

『心画軌範』『和俗童子訓』の中には北宋・蘇軾（一〇三六—一一〇一）の『東坡題跋』からの引用があり、益軒が楷書↓行書↓草書の学書法を唱える根拠としている。『心画軌範』以後、『東坡題跋』の内容が日本書論にどのような影響を与えているのかを見ていくため、『日本書論集成』（全八巻・汲古書院）を用い、江戸時代に書かれた書論の調査を行った。その結果、日本書論における『東坡題跋』の引用には一定の傾向が見られることが明らかとなり、『心画軌範』『和俗童子訓』での提唱が『東坡題跋』の日本での受容に関わっていると考えられる。一方で、当時においてすぐには一般的な学書法にはなつていかなかった側面もあり、『東坡題跋』の内容が益軒の著書によつてどのように広がり、わが国で受容されていったのか考察したい。

午前の部 第二会場 ②

夏目漱石『行人』と『喪乱帖』

帝京大学大学院文学研究科日本文化専攻博士課程後期課程二年

河島 由弥

夏目漱石(一八六七〜一九二六)の小説には、書や絵画といった美術作品が数多く登場する。それらは物語における単なる背景描写の類などではなく、時として登場人物のモチーフになるなどの重要な役割を果たす場合も存在する。例えば、大正四年(一九一五)に発表された『道草』においては、作中において「龍門二十品」の拓本が登場するが、その書写内容が小説の場面展開と関連性を示しているなど、漱石の小説に登場する書写作品においては、その書写内容が物語に關係する場合が存在することが近年の研究において指摘されている。

さて、そうした先行研究の視座を援用することで、『道草』の前に発表された『行人』(大正元年〜二年まで連載)において登場する『喪乱帖』に対しても新たな解釈を試みる事ができる。『行人』における『喪乱帖』については、それが登場する場面が、小説の連載とほぼ同時期に東京国立博物館で開かれていた展覧会がモチーフとなつてゐることが判明しているに留まつており、主人公がそれを観て「つまらない」と感想を述べた点に対する解釈についてはあまり検討されてこなかった。しかし、先述の『道草』の例を考慮すれば、同時期に執筆された『行人』においても、登場する書写作品の書写内容が小説の物語に何らかの関連性を有する可能性は十分考えられるであろう。

本発表では、そうした『行人』における『喪乱帖』の登場が意味することの解釈をきつかけとし、漱石の文学作品における書写作品の意味について検討を試みたい。

午前の部 第二会場 ③

植民地期の朝鮮書道 ―朝鮮美術展覧会を中心に―

福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻 美術教育コース

日高 拓哉

一四四六年に李氏朝鮮第四代国王である世宗大王により公布された「訓民正音(ハングル)」が、国民に大衆化される十九世紀頃までの朝鮮に関する日本・中国との書道関係史研究は多くみられる。また最近では、日本の書写教育との比較を中心に、韓国における書道教育に関する研究も進められている。しかし、十九世紀以降の韓国の書に関する研究は十分とは言えない。ハングルに関する文献も、楷書や行書などの基本書法を示したものはあるものの、ハングル創制後の書の変遷や近代書家に関する文献は数少ない。さらに、日本に占領され、言語支配下に置かれた三十五年間については、韓国においても資料が不足しており「空白の時代」とされている。

本研究は、植民地期の朝鮮における書の実情を明らかにするために、当時、朝鮮総督府により開催された朝鮮美術展覧会を中心に考察を進めるものである。朝鮮美術展覧会は一九二二年から一九四四年まで全二十三回が開催され、そのうち第十九回まで図録が発行された。ここでは、書の部門が存在した第十回までの図録を基礎資料とし、展覧会開催に至る背景とともに図録の掲載作家とその作風を考察する。この研究により、当時の朝鮮の作家たちの趣向が明らかとなり、また、言語支配下に置かれた中でのハングルの存在が、当時の書だけでなく言語支配政策を示す一資料として「空白の時代」を埋めるものであることなどを論じたい。

## 午後の部 ①

### 鈴木翠軒の書風形成

— 国定教科書執筆を中心に —

新潟大学講師 清水文博

鈴木翠軒が戦前に国定教科書を執筆していたことは、よく知られている。鈴木が教科書執筆と教科書の実技講習の疲れで神経衰弱になり、その後新たな書風を展開したことなどをみても教科書の執筆は、鈴木が書風形成に大きな影響を与えたものであったことがうかがわれる。鈴木自身は、三十一歳から四十歳ぐらいまでを自身の書風形成にあたる「基礎研究時代」と述べている。その後、四十四歳からの国定教科書執筆は、その「基礎研究」の上に積み上げたものといえるが、鈴木のいわゆる翠軒流の形成を明らかにするには、国定教科書の細部にわたる分析が必要になるであろう。

鈴木が書いた国定教科書は、漢字部分を初唐の楷書、仮名部分を寸松庵色紙等が参考にされたといわれる。しかし参考にされた古典の種類等の詳細がどのようなものであったかの詳細な分析は、これまでなされてこなかった。鈴木が教科書執筆にあたっていたのと同時期に鈴木が設立した新興日本書道会は、競書等様々な事業を行っている。そして同書道会が発行した『新興日本書道』では、鈴木自身が国定教科書の執筆にあたりどの古典を参考にしていたのかを記述している。

本発表は、新興日本書道会の活動や『新興日本書道』の分析を中心に、鈴木翠軒の書風形成の基礎をなした国定教科書執筆の詳細を明らかにしようとするものである。

## 午後の部 ②

### 明治期における石碑の制作について

— 長三州と日高秩父の関わりを中心として —

東京学芸大学 准教授 橋本栄一

昨年度本学会において、日高秩父の石碑制作を通して見た明治期以降の立碑に関する発表を行った。その際、東京学芸大学蔵日高秩父コレクションを中心に考察するとともに、フィールドワークによって実態の調査を進めていき、明治期以降の立碑については、戦争碑の存在が大きいことをはじめとして、いくつかの知見を得ることができた。しかし、それに伴って新たな課題も生じてきた。

日高秩父は石碑の揮毫の際、書丹を行った形跡はなく、何枚もの原稿を書き、石碑そのものの設計図に当たる雛型を作り、石工に刻せるという方法を採用していた。また、篆額や碑文そのものを代筆する場合があることも明らかにした。

そこで、今回は、日高秩父の師とされる長三州（一八三三—一八九五）の立碑活動まで視野を広げ、考察を行っていく。長三州は、幕末に長州の奇兵隊に参加し、戊辰戦争を転戦する。維新後明治政府に出仕し、学制の制定をはじめ明治初期から多くの教育行政に携わったことは夙に有名であるが、書の分野でも様々な活動を行っている。長三州の仕事や人脈の多くを日高秩父が受け継いでいく中で、石碑の制作についても、その人脈や制作方法を継承したことが予想される。長三州と日高秩父に関する新たな資料やフィールドワークに基づき明治期における石碑の制作の実相について解明していきたい。

北魏洛陽の墓誌と漕運の関連性に関する一考察

愛媛大学・教授 東 賢司

隋の煬帝は、南北朝を統一した後、大規模な運河建設を行った。東都である洛陽もその運河網の一都市として機能しており、穀水側には「含嘉倉」と呼ばれる大規模な穀物倉が河川の脇に整備されていた。一方、隋代以前の洛陽においても、河川を使用した漕運は盛んに行われていたが、これは、洛陽の地形と大きな関係がある。洛陽は四方を山岳で囲まれた盆地であり、山岳から流れ込む豊富な水が盆地を潤している。何本かの河川が流れ、これらを巧みに組み合わせ物資の運搬を行っていたことも確認できている。

筆者は過去に数回、洛陽市内から北に数キロの邙山地帯の調査を行ってきたが、大規模な墳墓を建設するための建築材はどのように運ばれてきたのか疑問に思っていた。漢魏故城から邙山までは直線で十五キロ程の距離がある。また邙山は険峻な山ではないが、漢魏故城からの最大高低差は百五十メートルある。牛馬に頼るしかない時代に、大量の重量物を陸路により運ぶのは難しいと考えるのは自然であろう。一方、北魏時代には邙山には「纏水」という河川が流れており、墓誌銘には埋葬地にこの河川の記述が見られる。地理的な条件を考えると、墓誌や墳墓の建築材料などの重量物は河川を使用し、運ばれたのではないかと仮説を立てるようになった。これは、墓誌がどこで作成されたのかを推定するヒントにもなると思われる。

本論では、洛陽出土の墓誌銘から河川の記述を抜き出し、また、埋葬地の場所を地図化して、河川部と山岳部等による墓誌の書風に違いを確認するなどして、河川を利用した墓誌の運搬の可能性があるか検証したい。